

タマカイの親魚養成

多和田真周・仲盛 淳・狩俣洋文・仲本光男・道清勇介*

1. 目的

魚類養殖業振興のために、有望な養殖魚種である大型ハタ類（タマカイ）の種苗生産技術および養殖技術の確率を図る。本県で養殖されている主な魚類はマダイ、ハマフエフキ、ヤイトハタ、スギの4種である。平成13年県農林水産部の統計資料ではこの4種の生産量は893t生産金額は8億円である。魚類養殖の過去10年間の生産量、生産額の推移をみても平成10年まではマダイが優占していたが、平成11年からスギが台頭、平成12年からはスギが大幅に生産量をのぼしており、この傾向はここ数年続くものと思われる。しかし、本土市場における魚類養殖魚の相場が安価で推移しているため、スギの流通価格は、kgあたり800円以下であり養殖業者は苦しい養殖経営を余儀なくされている（スギはほとんどが本土出荷である）養殖漁家の経営向上を図る意味からも対象魚種の複数化（地元産の高価格魚種の養殖）を推進する必要がある。ヤイトハタも順調に生産量をのぼしているが、流通価格の高い魚種へ移行させるためにもタマカイの種苗生産技術の確立を図る必要がある。

2. 方法

タマカイは鹿児島県大島郡瀬戸内町篠川湾で飼育されていた10尾（推定全長80～120cm・推定体重10～40kg）を購入、2001年11月2日に活

魚車8tトラックを使用して、名瀬市→那覇市→石垣市とカーフェリーを乗り継ぎ、34～35時間を要して輸送、直ちに200klコンクリート水槽に収容した。注水量、給餌種類、給餌量等親魚養成方法はヤイトハタの養成方法と同様である。水槽底での擦り現象や摂餌量が落ちた場合は寄生虫が寄生しているものとみなし、水槽替えを兼ねて淡水浴+駆虫剤による寄生虫治療を実施した。

3. 結果

飼育当初は輸送によるストレス、海面小割網生簀からコンクリート水槽に変わったことによる環境の変化、水温下降による低水温により摂餌不良状態が翌年2002年3月頃まで続いた（未摂餌個体9尾）。4月以降は水温上昇とともに摂餌状況が良くなり全個体が摂餌するようになった。

表1に測定結果を示した。約1年経過後の全長平均は37.5mm伸長、体重平均では3.4kgの増重が認められた。なお、NO.10（群のなかでは最大）が5月26日に、NO.6が10月26日に斃死した。NO.10は水槽収容当初から良く摂餌した個体であるが4月頃から徐々に餌食いが悪くなり斃死前1ヶ月からは全く摂餌しなくなった。外部に異常はみられず、開腹したところ消化管、生殖腺に大きな腫瘍が形成されておりこれが間接的な斃死要因と思われた。NO.6については斃死原因は不明である。

表1 タマカイの親魚測定結果

2002年2月4日測定				2003年2月14日測定				備考
NO	全長 (mm)	体長 (mm)	体重 (kg)	NO	全長 (mm)	体長 (mm)	体重 (kg)	
1	832	671	10.63	1	853	708	14.84	10/26 斃死
2	979	804	16.83	2	1045	867	23.89	
3	874	716	15.71	3	935	776	19.87	
4	986	806	16.5	4	1044	836	24.57	
5	988	804	19.19	5	1047	856	25.67	
6	985	787	20.74	6	—	—	—	
7	983	794	17.53	7	1016	828	21.51	
8	1096	910	25.83	8	1159	952	34.36	
9	1086	884	25.62	9	1096	893	25.02	
10	1248	1024	40.55	10	1235	1018	35.66	

*非常勤職員